



映画沼によろこそ

会員 豊崎 寿昌 (48期)

リブラのコーヒブレイクに寄稿するのは2度目、初回は確か日本泳法についての記事を28年ほど前に掲載してもらった記憶である（古すぎてオンライン上に残っていない）。で、今回は10年前から沼に落ちた劇場映画鑑賞のお話である。3年前に「自由と正義」の「ひと筆」コーナーに『劇場映画オタク』という世界」という駄文を書いて「弁護士業務と関係がないじゃないか」と怒られた（「執筆要項にはそんな要件はないじゃないか」と言い返したらそのまま掲載されてしまった）のだが、性懲りもなく本コーナーにも似たような内容で寄稿する。

そもそも人がある映画作品にハマるためには、通常人には超えることが困難な二つのハードルを最初に超えなければいけない。「レベル1＝同じ映画を劇場で複数回観る」と「レベル2＝ぼっちで劇場に行く」ことである。この二つを超えてしまうとそこはもうオタクの沼地の入口であり「レベル3＝複数シネコンの会員になって早期予約して観る」「レベル4＝IMAXなどのラージフォーマットや音響にこだわり出す」といういっぱしのシネフィルっぽくなり、やがて好きな作品を通じ「レベル5＝ひいきの監督や作品のシリーズができる」と「レベル6＝監督の舞台挨拶上映回に行く」ことになる（数えてみるとこの10年間で48回行っていた。うち新海誠監督が15回、吉浦康裕監督が9回である）。いわゆる聖地巡礼（＝レベル7）はそれほど熱心な方ではないが、そうはいつでも「君の名は。」の飛騨古川や糸守湖のモデルの松原湖（諏訪湖ではない）、「アイの歌声を聴かせて」の佐渡などは訪問している。ロードムービーである「すずめの戸締まり」では、水俣の湯の鶴温泉、大分の湯平温泉、佐賀関、愛媛の八幡浜、福島の大熊～双葉、気仙沼の大谷海岸、岩手の宮古など数年かけて訪問した。

さて、どんな映画もいつかは上映が終わりに向かうときが来るが、封切館の大手シネコンでの上映が終わ

った時期に地方のミニシアターなどで短期間公開されることが多い。こうした上映を追いかけて地方に向かうのが次なる沼（＝レベル8）である。自分は上記の「アイの歌声を聴かせて」で丹波市のエビスシネマ（真空管アンプ上映が特色）や聖地佐渡のガシマシ



岩手県宮古市赤前「すずめの戸締まり」最後の扉のモデル地

ネマ（金山鉱山長の元社宅）でこのハードルを超えてしまい、その後「すずめの戸締まり」では聖地宮古市のシネマリーナや島根・益田市の小野沢シネマに行くなどした。

何かの沼にハマると人はSNSを始める（＝レベル9）。自分の匿名Xアカウントも、特に生産的な投稿はしていないものの、数年運用しているとたまに東弁のアカウントを凌ぐビューやいいねを稼いだりすると、ハンドルネームしか知らない相互フォロワーが増えていく。劇場で出会えば世間話する程度の仲ではある。そうしているうちに昨年、こともあろうに副会長任期中に最後の壁、同人誌デビューを果たしてしまった（＝レベル10）。とはいっても絵心などはないので、「トラベジウム」という作品の合同同人誌に文章で参加しているわけであるが。タイトル？タイトルはね……Xで身バレしたくないので誌面にカミングアウトすることはご容赦願いたいm〇m

なお、自分の名誉のためにセルフフォローしておく、特にオタク映画しか観ていないわけではなく、近時で言えば「シラート」とか「ロングウォーク」とか「大統領のケーキ」とか「ヒトラーの毒味役」とか、弁護士らしい映画もちゃんと観てます。はい。念のため。